最高の誕生日プレゼント

和藤渚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最高の誕生日プレゼント

【Ｎコード】
Ｎ１６６９Ｅ

【作者名】
和藤渚

【あらすじ】
バレンタインが誕生日の淳史くん。しかしいつも忘れられています。そんないつもの誕生日に……

前編（前書き）

淳史くんの日常を完結させたバージョンです。

前編

「ピピピピピピ」
という目覚ましの音と
「あっちゃ～ん朝よ～起きなさ～い」
という母親の声でいつものように目が覚めた
俺は母親を見て
「お母さんなんか言うこと無い？」
と言ってみたしかし
「別にないわね」
とあっさり言われた
「なら今日は何月何日？」
とまた聞いてみた
「2月14日だけど……あ！」
と思い出したようにいった。俺は期待した目で見てみると
「そういえばバレンタインだったね。親からチョコレートもらおうっていうの？」
と言われて絶対忘れてるなと思いおれはがっかりした。
そして学校に行った。
「バカね忘れるわけ無いじゃない。今年は最高になるでしょうね」
とがっかりした息子の背中を見て思った。

学校ならきっと……思っていたが現実は厳しかった。
「おう！　おはよう平田」
と友達の大浦が声をかけた

「今日は何の日だ？」
と俺は聞いてみた
「何そんなこと聞いてんだよ。バレンタインだろ？」
こいつも忘れてると思ってがっかりした。
「なにがっかりしてんだよ男からもらおうってか？気持ちわりい」

俺の名前は平田淳史　高校１年生。実は今日２月１４日、バレンタインデーは俺の誕生日なのだ。しかし忘れられている。

こうしていつものように授業が始まった。
１時間目　数学
俺の前の席の人たちが大きな声で話していた
「こらそこ！！」
とチョークがとんできた。
すると前の人が見事によけ俺に命中。
俺は一瞬意識がとんだ

３時間目　理科
「今日はアルコールランプの使い方だ」
ノートをとってるとジューという音がする。
なんだか焦げ臭い
俺をみてみんな騒ぎ出す
「平田君大丈夫？」

「なにが？　……あち、あち、あち、あち」
なんとおれの髪が燃えていたのだ。しかし幸いにもはたいて火を消し、髪が少し焦げただけだった。
そして昼休み
「お前今日ついてねえな」
「チョークは当たるわ、髪はこげるわ」
「ほんとだよ。しかも誕生日だと忘れられてるし」
とぼそっといった
「なんかいったか？」
「いや」
そんな低いテンションのまま今日のイベントの話になった。
「今んとこなんこもらった？」
と大浦ともう1人の友達下島と話していた
「俺１５個。もうすでに去年の数になったな」
と大浦がいった
「いいな俺にも分けろよ」
「やっぱ大浦は格が違うな」
「下島は？」
「俺は０」
「お前はどうなんだよ？平田」
「俺も０だよ」
とさらにテンションが下がった

そのまま午後の授業へ
５時間目　体育
男子はハードルで女子はソフトボールである
おれが走っていると
「あぶな～い」

と遠くで叫び声がが聞こえてきた
「え？」
と声の方向を向くとボールが俺のほうに向かってくる。ものの見事に俺に当たった。
「なんで今日は次々と……」
と気絶した。
気がつくと保健室にいた
「大丈夫か？」
「よかった気がついたんだ」
そこには大浦と下島がいた
「なんか今日ホントついてないな」
「なんかとりつかれたんじゃねえ？」
「不謹慎なこというな」
と大浦が下島に注意した。
「問題ないと思うけど一応病院いったほうがいいわね」
と保健の先生に言われ俺は保健室を後にした。
そしてチョコもプレゼントも貰えずに放課後になった。
「ゲーセン行こうぜ。大浦、下島？　クラッシュオブファイター４が入ったんだ」
と誘ったのだが
「すまんこれから用事あるんだ」
と大浦に断られ
「俺も今金ねぇ～からパスとしとくわ」
とゲーム好きの下島にも断られた
結局一人でゲーセンにいくことにした

そして校門で
「すいません！！」
と突然俺の前に女の子が現れた
（うん？なんだ）

「あのこれ！！」
（よっしゃー！！　今日初めてのプレゼントか？　もしかして春が来るかも）
と思う俺。
だが
「あの……これ大浦くんに渡してください！！」
（だよなぁ～こうくるよな）
「うん、わかった」
と笑顔で返す俺。
そして魂がぬけたように歩いていく
「あぁ……この状態をクラッシュオブファイターで晴らせるかな……」
「ちょっと大丈夫ですか？」
「うん。大丈夫だよ」
気にする女の子。
ゲーセンに到着
さっそくクラッシュオブファイター４をやってみる
「新キャラのアルタイルまである」
「よし！！　今日のうっぷんをはらすぞ！！！」
気合満天でコンピューターと戦っていた。するといきなり乱入者が。そしてその人と戦うことになった。
「うわ、うわ、うわ　Ｙｏｕ　ｌｏｓｅ」
とあっさり負けてしまった俺。挑発する対戦相手。
お札を一気に小銭に代えいざ対戦！
「ＹＯＵ　Ｌｏｓｅ」
「ＹＯＵ　Ｌｏｓｅ」
「ＹＯＵ　Ｌｏｓｅ」
どんどん小銭が無くなっていく。
「まだまだ」
と小銭をつぎこむ

「ＹＯＵ　Ｌｏｓｅ」
「ＹＯＵ　ｌｏｓｅ」
「ＹＯＵ　ｌｏｓｅ」
「くそ～まだまだ」
とゲームの小銭を手探りで探す淳史。無いことに気づき財布を見てみる。
中身はからだった。
がっかりする俺。
「おい、おい！　兄ちゃん弱すぎるにもほどがあるよ。よくこんなんでゲーセンきてるな？金をどぶに捨てるようなもんだ。あきらめずに立ち向かってくるのはかってやるけど。じゃあな。少しは強くなっとけよ」
「あぁ……金欠だ。これでマンガが買えなくなった。」
（だいたいなんで今日に限ってこうついてないのかな。結局プレゼントもチョコレートも貰えなかったし）
気落ちして帰っていると、
ブーン……というトラックの音がしたのは家の隣だった
「今頃引越しか？　珍しいなこんな時期に」
と思いながら家に帰った
母親に聞いてみるとどうやら誰かが引っ越してくるらしい。
母親は、誰がくるんだろうね？とわざとらしい口調だった。
おれは部屋に戻って着替えているとチャイムがなった。すると下から
「いま風呂掃除してて手が離せないの。ちょっとでてくんない？」
といわれしぶしぶ玄関のドアを開けると
「あっちゃん久しぶり～」
とめちゃめちゃ見覚えあるやつが飛びついてきた。

後編

「いま風呂掃除してて手が離せないの。ちょっとでてくんない？」
といわれしぶしぶ玄関のドアを開けると
「あっちゃん久しぶり～」
とめちゃめちゃ見覚えあるやつが飛びついてきた。
俺はとっさにドアをしめたそしてチェーンをかけた。そしてそいつは頭をぶつけた。
（なんであいつがここにいるんだよ？あいつ北海道にいたんじゃなかったのかよ！！　これは夢か？　いや、とりあえず落ち着け、落ち着くんだ淳史。）
そして大きく深呼吸して再度ドアを開けてみる。
（あいつだ。間違いなくあいつだ・・・なんで今日はついてなさすぎなんだよ俺。なにか悪いことでもしましたか？　神様）
「ちょっとなんでチェーンしてんのかな？」
と言われ俺はまたドアを閉めた。
「いれてくれないかな？　おばさんにあいさつしたいんだけど。てかなんで閉めんのよ」
「知らねーよそんなの。さっさと帰れや」
「お願いいれて」
「いやだ」
「入れてよ」
「いやだ。入れるもんならはいってみろ？まぁできねだろうけど」
「もう1度言うよ。これが最後だからね。入れてくださいお願いします」
「い～や～だ」
「イヤなら仕方ないわね。あっちゃん」
とそいつはちょっとドアから下がり構え始めた
「はあ～はっ！！」

と回し蹴りで俺はドアともろともに吹っ飛ばされた。
（そうだった。こいつ空手強かったんだっけ……）
「あ～あいれてくれなかったからこわしちゃったじゃない」
そして母親が来て
「なにようるさいわね」
「あ～きたのね。いらっしゃい美香ちゃん」
「すいません玄関壊しちゃいました。ちゃんと弁償しますからね」
「いいのよ。あっちゃん！」
と俺を呼ぶ
「アンタのお小遣い当分ないから」
「え？　なんでだよ」
と不満げに言う俺。
「あれ？　こうなったのはだれのせいかな？　しかも美香ちゃんに寒い思いもさせて」
「だって……」
俺は反論できなかった
「それよりなんで美香がここにいるんだよ？」
「そうだったわねいってなかったわね。今日引っ越してきたの」
美香とは磯山美香。幼なじみでよく小さい遊んでいた。小学校に上がると同時に親の転勤で北海道に引っ越したのだ。なので俺と美香は１０年ぶりの再会である。
「なんでどういうこと？」
俺は頭にはてなマークが３つぐらい浮かんだ。
美香いわく父親がアメリカに転勤が決まり、当初は美香も一緒についていくつもりだったが、美香はついて行くことに猛反対して結局日本に残ることになったらしい。それで女一人じゃ心配だと父親が俺ならとこの街に行くようにいったらしい。
（またおれも偉く信頼されたもんだな）
この引越しは半年前にきまっていたらしく、ウチに１番に連絡が来たそうだ。その時俺にはこのことは絶対俺には内緒だということを

伝えたらしい。なぜなら俺を驚かせたかったらしい
（こいつ）
「ところでおじさんとゆかりちゃんは？」
「ああうちのバカ亭主は今出張中でかえってくるのはあさってかな？」
「大変ですね」
「ゆかりはもうすぐ帰ってくると思うよ」
と居間にはいって話していた。ゆかりとは2つ歳が離れているおれの妹である
「どうよ？　１０年ぶりのこの街は」
「なんかだいぶかわった感じですね。私がいた頃は結構畑や田んぼがあったのに、今は見渡せばマンションやビルばっかりで。私の家の周りは全く変わってないようで」
確かにこの街はだいぶかわった。特にここ5年で大きく変わった。なんだかここら辺は環境がいいようで引っ越してくる人が急増し、住める物件が追いつかない状況であった。
「そういえば、美香ちゃん前と同じでウチの隣だよね。困った時はいつでも気軽にいってきて」
「ありがとうございます」
「こなくていいよ。ていうかくんな」
「そんなことといわないの」
笑顔で俺の頭を殴っていった。
「そういえばあっちゃんって友達いるの？」
「いるよ！！　そりゃ」
「昔はゆかりちゃんと私しか遊び相手いなかったもんね」
「いつの話だよ！！」
「そうそう、おままごとしてはあっちゃんが旦那役でいつも美香ちゃんに尻にしかれてたわね」
「ただいま。」
「お帰りあなた。今日給料日だったんでしょ？」

「うん」
「でいくらだったの？」
と見せる僕。
「何でこんなに安いの？」
「それは……」
「うちにはまだ3歳のゆかりがいるんだらね。しっかりしなさいよ」
5歳とは思えないこの設定。思い出すだけでぞっとした。
「あら！もうこんな時間悪いけど買い物いってきてちょうだい？
二人で」
「え？　二人で？」
「ええ、１０年ぶりの再会なんだしつもる話もあるだろうから。そうだ！！　今日ウチで食べない？」
「いいですよ。そんな悪いし」
「遠慮することなわよ。その方がゆかりも喜ぶし、それにお父さんからもくれぐれもよろしくって言われてることだし」
「ならお言葉に甘えて」
ということで美香も入れての夕食になった。そして俺たちは家を出た
「ここの商店街はかわってないんだね」
「まぁな」
「今日の夕飯のメニューって何かわかる？」
「今日は確かシーフードカレーっていってたな」
「あら？　美香ちゃん？」
と声をかけてきたのは野菜屋のおばさんだった。
「おばちゃん、久しぶり」
「オシドリ夫婦の復活かい？　ハハハハ」
「やめてよ、おばちゃん。ハハハハ」
「そうだよ、ニンジンと玉ねぎとキャベツちょうだい」
「あいよ。はい５６０円ね。それと今日入ったばかりの大根。」
「俺、言ってないよ。」
「いいっておまけだよ。美香ちゃんとあっちゃんのオシドリ夫婦の

復活のお祝い。あっちゃん？　美香ちゃんを泣かせたら許さないからね」
「俺たちはそんなんじゃないんだよ？おばちゃん」
と誤解されたまま店を後にした
「荷物よろしく」
「ちょっと待てよ。たく自分勝手なとこは変わってないだから」
そして魚屋にいき
「あれ？　美香ちゃんじゃねえの？　戻って来たんや？」
「ええ、ついさっき」
「そうなんや。へ～淳史くん？」
「なに？」
「嬉しかろう？」
「なんで？」
「だってお嫁さんが帰ってきたんよ」
「おじちゃん？お嫁さんって……」
「美香ちゃんは淳史くんのお嫁さんじゃなかとな？」
「違います！！」
「あなた？　そんなじゃなかたい」
「淳史くんの奥さんたい、奥さん」
「あ～奥さんか奥さん」
「なんでそう飛躍させるわけ？」
「ハハハ冗談よ、冗談」
「でもホントに奥さんにするっちゃろ？　淳史くん？」
「ホントなの？　あっちゃん」
と顔を赤くする美香。
「なに真に受けてんだよ」
「え～とアサリとイカとエビね」
「はいよ、８６０円ね」
「なにこれ？」
渡された袋のなかにトロの部分がはいっていた

「ちょっとおじちゃん？　いいの？」
「よか、よか。美香ちゃんが戻ってきたおまけ」
他にも
「あら！美香ちゃん、大きくなったわね。これ持っていって」
「久しぶりのツーショットだね」
「よし！！　よりを戻した2人にごほうび」
とたくさんいろんなものをもらった
「私ってそんなに人気ものなの？」
「バ～カなわけねえだろ？」
小さい頃よく2人で商店街にいってはいろいろともらったものだ。
美香が引っ越してからはもっぱら少なくなったが

「よし、これで全部だな。帰るか」
「ちょっと待って行きたい所があるの」
「どこに行くんだ？」
「いいから、いいから」
と言って落ち着きのない子供のような美香。
そんな美香にちょっと困惑した笑みでついていく俺。
（たくっしょうがねえな）
家を通り過ぎ、見覚えのアル道を歩いていく。
（この道って……でここを右に曲がると）
そこには懐かしい光景があった。
「この公園って……」
「覚えてる？　この公園」
「ああ。この砂場でやってたな、おままごと」
「うん、そうだね」
「いつも俺がシリに叱れた場所」
俺にとっては悪い思い出しか思い出さない場所である

しかし美香にとっては
「よく言うわよ」
「だってホントのことだろ？」
「懐かしいな、本当に。ねぇ覚えてる？」
「なんだよ？」
「私がいじめられていると」
１０年前
「ねぇねぇ美香ちゃん？　今日は何色のパンツはいてんの？」
と近所の悪がきたちがいつも美香をいじめていた。
「何言ってるの？」
「そ～れ～」
とスカートをめくられ泣き出した美香
「わ～ピンクだ」
「お前ら！！　女の子をいじめてそんなに楽しいか！！！？　たくっこりねやつらだな」
といつもその悪がきたちとケンカして毎度のごとく勝利。
「覚えとけよ～」
とありきたりの悪役のセリフを言って去っていく
「大丈夫か？　けがねーか？」
「うん。ありがとう助けに来てくれてホントに嬉しかったよ。」
と満面の笑みを浮かべる。
「バ～カ。勘違いすんなよ！！　偶然通りかかったから来ただけだ。決して心配で走ってきたわけじゃないからな」
（あっちゃんたら）
「……ってな感じでいつも私を助けてくれた。私の大切な場所なの」
（そっか美香にとっては）
「あ～寒い！！　帰るか」
「そうだね。帰ったらおばさんのカレーだ」

「ただいま」
「お帰り」
「あ～美香お姉ちゃんだ」
とゆかりが抱きついた。
「ちょっとゆかりちゃん？」
「コラゆかり？」
と俺はゆかりを離した。
「ありがとう、これで完成できるわ。もうすぐできるから美香ちゃんは座ってて」
「ありがとうございます」
「俺は？」
「アンタは手伝い」
買ってきた中から必要な物を入れて完成した。
「いただきま～す」
とみんな食べ始めた。
「おいし～です。」
「ありがとう、そう言ってもらえてうれしいわ」
「お姉ちゃん？　私ね……」
話が盛り上がる食卓。
「なに一人黙って食べてんのよ！」
「何？　美香お姉ちゃんと久々に食べて緊張してるとか？」
「ちげ～よ」
「どう？　１０年振りの美香ちゃんとの食事」
「どうもねえよ」
「なに照れてるの？　あっちゃん」
「照れてねえって別に」
「美香ちゃん？あっちゃんね美香ちゃんが引っ越してから１週間ぐらいずっとひきこもってでてこなかっただから。出てきた時は目が真っ赤でね」

「そうなんですか？」
「そうだったの、お兄ちゃん」
俺は恥ずかしがって
「またそんなこという。一番親しい友人がいなくなったんだから当然だろ？」
「それに小さい頃よく『僕ね、美香ちゃんと結婚するんだ』って言ってたのよ」
「そうなんだ」
「そんな昔のこと覚えてねえよ。それに今はなんも思ってないの」
「へ～？　ならこれはなにかな？」
「いつの間に？！！　返せ」
「はい、美香ちゃん」
「なに渡してんだよ！！」
美香は思い出したように
（これは……ふんっこんなんまだ持ってたんだ？）
それは俺の家族と美香の家族で川でキャンプをした時に美香が川で転んで倒れてる写真。
美香は嬉しさでいっぱいだった。
「勘違いすんなよ？これがおもしろかったから取っといただけだ」
「なこと言っちゃって素直じゃないんだから」
「うるせー」
食べ終わり、美香は家に帰った。帰り際
「またお隣同士よろしくね」
「おう」
と懐かしい笑顔で出て行った。
俺はその笑顔にドキッとした。
こうして俺の誕生日は終わった。
俺の今年の誕生日プレゼントは後にも先にもない最高のプレゼントだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1669e/

最高の誕生日プレゼント

2010年10月9日04時44分発行